太宰治の中期文学における《苦悩》の再解釈
－「富嶽百景」と「黄金風景」を中心に－

金奈炅*
nakyungssem@hotmail.com

〈目次〉

1. はじめに
2. 〈私〉の富士山
　2.1 御坂峠の到着前の富士山
　2.2 御坂峠の到着後の富士山
3. 〈私〉の変化
　3.1 〈私〉の《苦悩》自画像
　3.2 〈私〉の《光》
4. 《酸漿》と《黄金》の意味
5. おわりに

主題語: 人間百景(Hundreds of views of the human)、人間風景(Landscape of human)、光(Light)、単一表現(a single expression)、自由の心(Free mind)、心の平安(Peace of mind)、太宰治(Dazai Osamu)、光(Light)

1. はじめに

太宰治は結婚を境にし、太宰全期中、中期の始まりであることはよく知られていることである。昭和13年9月13日、東京での苦しい生活を引き払い、甲府御坂峠の天下茶屋に篭もり、新しい生活を送る。9月18日、津島美知子という女性とお見合いをし、昭和14年1月8日には簡素な挙式を挙げ、天下茶屋を降りてくる。甲府市内で新居を構え、再出発し、この期間においてだけは安定さを満喫していたと言われている。太宰の中期作品の初期作品に当たる「富嶽百景」と「黄金風景」を再検討し、中期においての《苦悩》の意味を探っていきたい。初期作品であるこの二作には苦しがっていた前期に比べ、《苦悩》像が描かれていないか、それから、共通点である変化に注目をしたからである。

「富嶽百景」は昭和14年2月1日「文体」第2巻第2号の創作と特輯欄に発表された作品であり、太宰の実話を元にしていることでよく知られている。パビナ-ル中毒でじたばたしてい

＊ 仁濟大学校　日語日文学科　非常勤講師

た太宰は、昭和11年10月13日、恩師である井伏鱒二と元家内である小山初代の美味しい嘘により、武蔵野病院に強制入院させられる。さらに、入院中は可愛がっていた小山と義理の弟のように仲よくしていた小館善四郎との不倫を発覚する。病院のことで彼らに嘘を付かれたことよりも、元妻の不倫事件がショックであるらしく、きっぱりと小山と離別を選択した。《私はその日までHを、謂わば掌中の玉のように大事にした。こいつの為に生きていた》[1]と思っていた太宰にとっては二回の不信感ということはどうしようもない気持ちに包まれざるを得なかったことであり、その気持ちがなんとなく伝わってくるようである。たぶんこれは生きる意味もなく、力も失えるほどの大事件であっただろう。その後、太宰治はつねにいっぱいの食客たちと酒を飲み、酔いつぶれ、まともな生活はせず、借金は増えるだけの日々を送っていた。恩師井伏はこういう乱れな彼の生活を放置しておけず、また生活が崩れ、パビナール中毒の再発を招くことになりかねないと思い、再婚でもしたらどうだろうかという救済策を出したのである。井伏は次のように結婚を急かしていた。

> ……甲府の斎藤さんといふ人の奥さんが、令嬢の縁談がまとまったので仲人になつてくれと云つて来た。…(中略)…。奥さんの女学校時代の友人のうちに四人の令嬢がある。三番目の令嬢を先日お話の太宰さんといふ若い作家のお嬢さんにお世話をして差上げたいといふ。本人はおとなしくて賢い人である。もし話がうまく運んだら、自分たち夫婦で媒酌してもいいといふ手紙であつた。…(中略)…太宰が来た時何も云わないで、封のまま写真を手渡した。太宰も何も云わないでそれを持ち帰つた。それから一週間たち二週間しても、太宰は写真について何も云わなかつた。私もきかうとしなかつた。一個月ばかりたつてから、私は旅行に出て御坂峠頂上の茶店に滞在した。…(中略)…その間に、たびたび太宰に手紙を出して、この山の上に来て私と入れ代わりにここに下宿したらどうかと勧誘した。[2]

太宰治はその誘いに答え、借金を返した上、下宿を引き払い、昭和13年の9月13日に御坂峠の天下茶屋に訪ね、19日には北芳四郎宛てに《十三日よりこちらに来て、仕事して居ります。山の中の一軒屋で、仕事より他には、なにもすることございませぬ。》[3]と本音を明かしていた。要するに、井伏が太宰を御坂峠に呼んだ理由は縁談の相手に会わせたい気持ちよりも、東京の下宿生活を切り上げさせたいための気持ちがもっと強かったと考えて

1) 佐古純一郎(1963)『太宰治論』審美社、p.88
2) 井伏鱒二(1989)『太宰治』筑摩書房、pp.31-32
3) 太宰治(1962)『太宰治全集第11巻』筑摩書房

もいいだろう。

実話の元で書かれた「富嶽百景」をまず理解を高めるため、概略を押さえておく。昭和13年の初秋、思いを新たにする覚悟で甲州の御坂峠にやって来た〈私〉は、様々な富士山に会っている。それまでの〈私〉は《デカダン》で《性格破産者》、わがままな人のように見られていた。御坂峠では忠実な生活をしているらしく、あおつらいむきの富士、三ッ峠のいい富士、結婚を決意させた富士など、念々と動いている自分と富士山の描写は数多く、見事であった。また、井伏や茶店の老婆をはじめ、多くの人達の素朴で純粋な温かい激励もあり、〈私〉を感激させた。美しい《月見草》のように緊張感は持続しながらも、そのように生きてみたいと覚悟を決め、山を降りてくる内容である。見合い相手と山を降りる前日、知的な、ある娘さん二人に写真を頼まれる。〈私〉は大きい富士山の前にいる二人を写真から追放し、富士山だけを写し、素直に感謝の気持ちを捧げ、下山する。その後、甲府から見た富士は《酸漿》に似ていると感動し、最後を締めくくっている。

要するに、作家である〈私〉は東京での辛い思いを新たにするために御坂峠に登り、そこで〈私〉を取り戻せる機会をくれた富士山に出会うようになったという内容であるが、続いて、照合作である「黄金風景」を読んでみる。昭和14年3月号「国民新聞」に掲載された作品であり、簡単に概略を押さえてみる。〈私〉は子供の時、のろくさいことが嫌いであったので、女中であったお慶をことさら嫌っていた。成長した〈私〉は船橋というところで病と闘いながら小説に取り組んでいるところ、40才に近い、痩せて小柄のお巡りさんに戸籍を調べにやって来られる。話の中、そんなに嫌いであったお慶の夫であることが分かる。三日後、お慶が家族連れで家を訪ね、昔の悪行に卑屈なことが恥ずかしく、用事にかこつけているかのように、逃げてしまう。帰り道、思いがけずにお慶家族が平和そうにのどかに笑っている姿を見る。さらになんと、彼らの会話は〈私〉のことを賞讃していたのであった。負けたなと思い、立ったまま涙を流し、《明日への出発の光》を見たような気持ちに包まれる。「黄金風景」での〈私〉は女中であるお慶により、自分を振り返ってみる機会を与えてもらい、気持ちが揺れ動いていることがわかった。つまり、二作では〈私〉という主人公が何モノかによって変わってしまう共通点を持っていることが確認でき、この共通点を押さえながら、先行論文をまとめ、作品照合をしてみる。

「富嶽百景」に対しての同時代批評を探れば、三上秀吉[4]は《なかなか面白い作品》であり、島尾敏雄[5]は《生きることの喜びを感じさせて呉れる。そして正直に云ひと、こう云ふ

4) 山内祥史編(1997)『太宰治著述総覧』(東京堂出版、pp.290-293)に収録され、以下、省略する。-三上秀吉(1940)「太宰治著『女の決闘』『思ひ出』」『文学者』

風な小説が書きたくてたまらぬ感じを起させる》ほどの作品であると激賞していた。その反面、すぐに発表されたにも関わらず「黄金風景」の批評は残念ながら、見当たらなく、関連論文も少なかった。二作に関しての先行論文を三つほどにまとめることができた。一つは太宰の自画像であるという指摘であり、相馬正一[6]は「黄金風景」と「富嶽百景」の《二つの作品に登場する主人公の〈私〉は共に作者の自画像》であると断言している。これは太宰治の作品ではよく出てくる設定であり、よく指摘される部分でもあるが、太宰の自画像の意見から離れ、作品論として広げてみたい。二つは「富嶽百景」の背景となる富士山に対しての指摘が多く、三谷憲正[7]は次のように述べている。

> 富士山とは一体何であるか。それは言われるように「俗世間」であってもよいし、封建的な「家」の象徴ででもありうるだろう。要は、有名であり、世俗的であり、誰でも知っているようなもの、にあてはまるのなら、何の象徴であってもかまわないはずだ。そうして意味においてならば、あるいは「父性」に伴う、家長的権威、日常性、通俗性、社会性などの象徴と考えてみてもいいだろう。「私」は、自身を含めて、このようなものから「距離」をおこうと試み、その「距離」の置き方を学んでいるように見える。なぜ「学ば」ねばならぬのか。おそらくそれは「私」が「富士」的世界へ赴くためだからだ。

三つは《月見草》の意味について指摘され、大塚常樹[8]は《富士と月見草の対峙には、大衆と、選ばれたものとしての芸術家(つまりは語り手自身)との対峙がさりげなく書き込まれている》と述べ、佐々木啓一[9]は《「富士には、月見草がよく似合ふ」は、自閉のなかの自由なイメージとして十分に主人公の美意識と倫理観によって価値づけられた「藁一すぢの自負」》であると解釈している。「黄金風景」の論文はあまり見当たらなく、全集の「解説」欄で奥野健男[10]は《自分の過去と現在を昔の女中の出現で、鮮かに浮き彫りにする。自分を許そうという甘さがあるが、まことに気持ちのよい楽しい短編》であると激賞していた。要するに、二作が激賞されていることは十分に承知の上であるが、主人公である〈私〉が何モノかの出現に刺激を受け、変わり出していることに対する指摘が無いことが

---

5) 島尾敏雄(1973)「昭和十四年日記」『幼年記-島尾敏雄初期作品集-』-前掲載(4)
6) 相馬正一(1985)『評伝太宰治第3部』筑摩書房、p.61
7) 三谷憲正(1998)「富嶽百景」『太宰文学の研究』東京堂出版
8) 大塚常樹(1999)「太宰治の道化について、富士山を念頭に」『太宰治-その終戦を挟む思想の転位-』双文社出版
9) 佐々木啓一(1989)「『富嶽百景』-自閉のなかの自由なイメージの世界-」『太宰治論』和泉書院
10) 太宰治(1962)『太宰治全集第2巻』筑摩書房-以下、本文の引用の詳細は省略する。

分かった。冒頭のところで照合対象においての理由や必要性を言及しているように、変化要因が人間であるか、物であるかの問題を探り、その変化によって、この作品にどのような影響を与えたかの疑問を探っていきたい。これを通じて、前期と変わっている太宰の心理を把握し、《苦悩》を再検討した上で、中期においての作品意味を考えたい。

2. 〈私〉の富士山

2.1 御坂峠の到着前の富士山

背景となっている富士山のことを《超俗性(高貴性・聖性)》や《世俗性(日常性)》で振り分けられ、《天下第一の富士》11)として解釈された上で、顔もろくに上げられないほど《封建的な「家」の象徴》であり、《「父性」に伴う、家長的権威、日常性、通俗性、社会性などの象徴》12)であるべきだと指摘されている。ところが、本論文では〈私〉が御坂峠に来る前と後の富士山に対する表現を本文から抜粋し、〈私〉の心境を探ってみる。こういう照合論文は今までの学説ばかりでなく、新しい提案になると思う。

① ……たいていの繪の富士は、鋭角である。いただきが、細く、高く、華奢である。北齋にいたつては、その頂角、ほとんど三十度くらゐ、エツフエル鐵塔のやうな富士をさへ描いてゐる。 (p.153)

② ……實際の富士は、鋭角も鋭角、のろくさと擴がり、東西、百二十四度、南北は百十七度、決して、秀抜の、すらと高い山ではない。たとへば私が、印度かどこかの國から、突然、鷲にさらはれ、すとんと日本の沼津あたりの海岸に落されて、ふと、この山を見つけても、そんな驚嘆しないだらう。 (p.153)

③ 十國峠から見た富士だけは、高かつた。あれは、よかつた。はじめ、雲のために、いただきが見えず、私は、その裾の勾配から判斷して、たぶん、あそこあたりが、いただきであらうと、雲の一點にしるしをつけて、そのうちに、雲が切れて、見ると、ちがつた。私が、あらかじめ印をつけて置いたところより、その倍も高いところに、青い頂きが、すつと見えた。おどろいた、といふよりも私は、へんにくすぐつたく、げらげら笑つた。やつてゐやがる、と思つ

11) 服部泰喜(2001)「富嶽百景」『終末への序章-太宰治論』日本国書センタ
12) 前掲載-(7)

た。人は、完全のたのもしさに接すると、まづ、だらしなくげらげら笑ふものらしい。

(pp.153-154)

④ 東京の、アパートの窓から見る富士は、くるしい。冬には、はつきり、よく見える。小さい、眞白い三角が、地平線にちよこんと出てゐて、それが富士だ。なんのことはない、クリスマスの飾り菓子である。しかも左のはうに、肩が傾いて心細く、船尾のはうからだんだん沈没しかけてゆく軍艦の姿に似てゐる。 (p.154)

御坂峠に登る前には富士山のことを、《エツフエル鐵塔のやうな富士》のように見えたり、《秀抜の、すらと高い山ではない》から、《驚嘆》するものでもなく、普通の家の近所にある小さい山のように見えたり、感じたりし、富士山への描写をしていた。また、十国峠から見上げた富士山は、すごく高く感じ、《よかつた》と感心もし、こんな現象を経験した人は《だらしなくげらげら笑ふものらしい》だろうと書き、場合によって、または気持ちによって、富士山への接し方と気持ちが揺れ動いていることが分かった。さらに、東京のアパートの窓から見上げた富士山は《くるしい。クリスマスの飾り菓子である。沈没しかけてゆく軍艦の姿に似てゐる》と言い、二度もそんな辛い思いはしたくないという覚悟で御坂峠に登っていた。富士山という一つのモノや背景設定であるのに、〈私〉の状況と気持ちによって富士山に対する気持ち変化があることであった。要するに、〈私〉が東京で普通の生活をしていたら、富士山も普通であり、きつい経験を接し、固い覚悟をきめざるを得ない事件に落ちこぼれていたら、富士山は普通の山ではなかったのである。《富士への露骨な反発という「暗」が何度かの揺り返しを経、究極的には感謝の念を素直に捧げるようになる「明」へと移転して行く》[13]上で、また、「明」に見えた富士山が「暗」に見え始め、御坂峠に登ったわけである。

2.2 御坂峠に到着後の富士

〈私〉には暗いイメージとして見え始め、感じていた富士山のことが、御坂峠に着いてから、どういう変化を見せ、感じていただろうか。その様子を本文から抜粋し、照合してみる。

13) 鶴谷憲三(1993)「昭和十四年」『国文学解釈と鑑賞第745号』至文堂

① ……私は、井伏氏のゆるしを得て、當分その茶屋に落ちつくことになつて、それから、毎日、いやでも富士と眞正面から、向き合つてゐなければならなくなつた。この峠は、甲府から東海道に出る鎌倉往還の衝に當つてゐて、北面富士の代表觀望臺であると言はれ、ここから見た富士は、むかしから富士三景の一つにかぞへられてゐるのださうであるが、私は、あまり好かなかつた。好かないばかりか、輕蔑さへした。あまりに、あおつらひむきの富士である。…(中略)…私は、ひとめ見て、狼狽し、顔を赤らめた。 (p.155)

② ……とかくして頂上についたのであるが、急に濃い霧が吹き流れて來て、頂上のパノラマ臺といふ、斷崖の綠に立つてみても、いつかうに眺望がきかない。何も見えない。…(中略)…茶店の奥から富士の大きい寫眞を持ち出し、崖の端に立つてその寫眞を兩手で高く掲示して、ちやうどこの邊に、このとほりに、こんなに大きく、こんなにはつきり、このとほりに見えます。と懸命に註釋するのである。私たちは、番茶をすすりながら、その富士を眺めて、笑つた。いい富士を見た。霧の深いのを、残念にも思はなかつた。 (pp.155-156)

③ ……甲府で私は、或る娘さんと見合ひすることになつてゐた。井伏氏に連れられて甲府のまちはづれの、その娘さんのお家へお伺ひした。…(中略)…井伏氏と母堂とは、おとな同士の、よもやまの話をして、ふと、井伏氏が、「おや、富士。」と呟いて、私の背後の長押を見あげた。私も、からだを捻ぢ曲げて、うしろの長押を見上げた。富士山頂大噴火口の鳥瞰寫眞が、額綠にいれられて、かけられてゐた。まつしろい睡蓮の花に似てゐた。…(中略)…あの富士は、ありがたかつた。 (pp.156-157)

④ 私は、部屋の硝子戸越しに、富士を見てゐた。富士は、のつそり黙つて立つてゐた。偉いなあ、と思つた。「いいねえ。富士は、やつぱり、いいとこあるねえ。よくやつてるなあ。」富士には、かなはないと思つた。念々と動く自分の愛憎が恥づかしく、富士は、やつぱり偉い、と思つた。よくやつてる、と思つた。 (p.159)

⑤ そこで飲んで、その夜の富士がよかつた。…(中略)…明るい月夜だつた。富士が、よかつた。月光を受けて、青く透きとほるやうで、私は、狐に化かされてゐるやうな氣がした。富士が、したたるやうに青いのだ。…(中略)…ずゐぶん自分が、いい男のやうに思はれた。 (p.161)

⑥「お客さん！起きて見よ！」かん高い聲で或る朝、茶店の外で、娘さんが絶叫したので、私は、しぶしぶ起きて、廊下へ出て見た。娘さんは、興奮して頬をまつかにしてゐた。だまつて空を指さした。見ると、雪。はつと思つた。富士に雪が降つたのだ。山頂が、まつしろに、光りかがやいてゐた。御坂の富士も、ばかにできないぞと思つた。「いいね」 (p.162)

⑦ ねるまへに、部屋のカーテンをそつとあけて硝子窓越しに富士を見る。月の在る夜は富士が青白く、水の精みたいな姿で立つてゐる。私は溜息をつく。ああ、富士が見える。星が大きい。あしたは、お天氣だな、とそれだけが、幽かに生きてゐる喜びで、さうしてまた、そつとカーテンをしめて、そのまま寢るのであるが、あした、天氣だからとて、別段この身には、なんといふこともないのに、と思へば、をかしく、ひとりで蒲團の中で苦笑するのだ。　(p.165)

⑧ 富士にたのまう。突然それを思ひついた。おい、こいつらを、よろしく賴むぜ、そんな氣持で振り仰げば、寒空のなか、のつそり突つ立つてゐる富士山、そのときの富士はまるで、どてら姿に、ふところ手して傲然とかまへてゐる大親分のやうにさへ見えたのであるが、私は、さう富士に賴んで、大いに安心し、氣經くなつて茶店の六歳の男の子と、ハチといふむく犬を連れ、その遊女の一團を見捨てて、峠のちかくのトンネルの方へ遊びに出掛けた。　(p.166)

⑨「富士山には、もう雪が降つたでせうか。」私は、その質問に拍子抜けがした。「降りました。いただきのはうに、―」と言ひかけて、ふと前方を見ると、富士が見える。へんな氣がした。「なあんだ。甲府からでも、富士が見えるぢやないか。ばかにしてゐやがる。」やくざな口調になつてしまつて、「いまのは、愚問です。ばかにしてゐやがる。」　(p.168)

⑩ ……娘さんの差し出すカメラを受け取り、何氣なささうな口調で、シヤツタアの切りかたを鳥渡たづねてみてから、わななきわななき、レンズをのぞいた。まんなかに大きい富士、その下に小さい、罌粟の花ふたつ。ふたり揃ひの赤い外套を着てゐるのである。…(中略)…私は、をかしくてならない。カメラを持つ手がふるへて、どうにもならぬ。…(中略)…富士山、さやうなら、お世話になりました。パチリ。　(pp.172-173)

⑪ その翌る日に、山を下りた。まづ、甲府の安宿に一泊して、そのあくる朝、安宿の廊下の汚い欄干によりかかり、富士を見ると、甲府の富士は、山々のうしろから、三分の一ほど顔を出してゐる。酸漿に似てゐた。　(p.173)

〈私〉が御坂峠に移ってから見上げ、接した富士山は《軽蔑》し、《青く透きとほる》ほどに変わり、《ばかにできない》存在となり、《偉い》《狼狽し、顔を赤らめた》《いい富士》であると、相当な変化を見せていることが分かった。富士山は何かが賴める《幽かに生きている喜び》であり、《お世話になりました》と言えるほどの、〈私〉からしては顔もろくに上げられないほどの《偉い》ものになってしまったのである。《風呂屋のペ

ンキ画》であり、《芝居の書割》であった富士山が今は正反対となっていた。その理由は何であるだろうかと疑問に思われる。《天下茶屋という茶店が「私」にとって「家庭」的・「家族」的なぬくもりに満ちた場》[14]であったこともあり得る。ところが、暖かい家で寝泊まりしたことでころと変わることであるかが疑問であり、富士山のことが《睡蓮の花》や《酸漿》に似ていると喩えられている理由と意味は何であるかのことも疑問に残る。三谷憲三が指摘していた《家長的権威》の富士山ではなく、《「対象」と「解釈の多義性」の主題》[15]で成り立っているという読みで解釈して行けば、〈私〉が御坂峠に移る前後はさすがに違い、様々な解釈ができると思う。《富士を否定し、俗物扱いしながらも「私」偉さには感服もしてみる富士への感受性は「私」に大いにある》[16]と言い張っている理由を押さえてみる価値があるはずである。御坂峠に移ってからの富士山はまるで《〈私〉の心の動きを反映する〈鏡〉》[17]であるかのように触れ、〈私〉の気持ちは揺れ動いていた。そのきっかけは単なる場所の変化、暖かい家で寝泊まりしたからだと断言できるかの疑問をこれから解決していきたい。

3. 〈私〉の変化

3.1 〈私〉の《苦悩》自画像

まず、〈私〉の変化要因のことに対して探る前に、作家である〈私〉が自分のことをどう思って生活をしているかを考えてみる。ある日、天下茶屋に新田という知人に多数の青年をつれてこられ、一緒にお酒を飲み、遊ぶ。その知人らは自分のことを先生と呼び、人との関わりをあまり持たずに生きていた〈私〉は不思議にその言葉を《まじめにそれを受け》ていた。自分は《誇るべき何もない。学問もない。才能もない。肉体よごれて、心もまづしい》人であっても、《苦悩だけは、その青年たちに、先生、と言はれて、だまつてそれを受けていいくらゐの、苦悩は》《藁一すぢの自負》であると高いプライドを持っていた。〈私〉は街角でよく見掛けられる普通の人の一人ではあっても、《苦悩》ということは人より深く抱えていたと言えるほどであった。第一にしていた《苦悩》とは何であるだろうか。佐古純一

14) 長谷川達哉(2007)「天下茶屋再訪-続〈教材〉としての『富嶽百景』-」『中央大学国文』第50巻 中央大学
15) 松本和也(2010)「「私」の再起/表現の達成-「富嶽百景」-」『太宰治の自伝的小説を読みひらく-「思ひ出」から『人間失格』まで-』立教大学出版会
16) 越次倶子(1981)「「富嶽百景」試論」『国文学解釈と鑑賞第』596号 至文堂
17) 鶴谷憲三(1996)「『富嶽百景』-その構造と時の流れと-」『国文学解釈と鑑賞』第781号 至文堂

郎[18]は太宰の人生と同一視し、次のように述べている。

> 人間でありながら、人間が信じられない。そこには、現代人の苦悩がある。おそらくその現代人の苦悩を自らの実存のなかで身をもって生きつづけたことが、太宰治の生涯とその文学だったのだ。…(中略)…私はその背後には初代の事件によって人間不信を決定的にされたと思う。

《初代の事件によって人間不信を決定的にされ》、《苦悩》を抱えさせられたという。たぶん太宰の年譜のことすら分かっていたら、それはあり得ることではあるだろう。ところが、〈私〉と太宰を同一視しないことを前提としているので、〈私〉の《苦悩》を違う方向で考えるべきである。〈私〉は日頃から《世界観、芸術といふもの、あすの文学といふもの》は何であるだろうかと、《未だ愚図愚図、思ひ悩み》、《身悶え》をしていた作家の一人であった。《苦悩》とは、悩んでいくことであり、それを抱えて生きていくことであり、そこから絶対に逃れきれない〈私〉も存在しているわけである。そんな〈私〉が御坂峠で何人かの女性と出会い、いろいろなことに悩まされつつ、変貌を見せていたのである。

> ① 河口局から郵便物を受け取り、またバスにゆられて峠の茶屋に引返す途中、私のすぐとなりに、濃い茶色の被布を着た青白い端正の顔の、六十歳くらゐ、私の母とよく似た老婆がしやんと座つてゐて、…(中略)…私のとなりの御隠居は、胸に深い憂悶でもあるのか、他の遊覧客とちがつて、富士には一瞥も與へず、かへつて富士と反対側の、山路に沿つた斷崖をじつと見つめて、私にはその様が、からだがしびれるほど快く感ぜられ、私もまた、富士なんか、あんな俗な山、身度くもないといふ、高尚な虚無の心を、その老婆に見せてやりたく思つて、あなたのお苦しみ、わびしさ、みなよくわかる、と頼まれもせぬのに、共鳴の素振りをみせてあげたく、老婆に甘えかかるやうに、そつとすり寄つて、老婆とおなじ姿勢で、ぼんやり崖の方を、眺めてやつた。 (pp.163-164)

〈私〉は老婆の行動から勝手に《憂悶》に受け入れ、《みなよくわかる》と断言し、まるで慰めているかのような《からだがしびれる》ほど自分に伝わっていると描いている。どうして、《御隠居》である彼女に違いないと言い張れるだろうか。それはたぶん《苦悩》持ちの〈私〉だからこそ、見えてくる《苦しみ、わびしさ》があったからではないだ

18) 前掲載-(1)

ろうか。佐々木啓一[19]の《老婆は、母の仮想された姿であると共に、表現者によって仮想された自己自身の姿》であるという指摘よりは、《苦悩》自画像で描かれていると言っておきたい。老婆は母でもなく、〈私〉でもなく、《苦悩》自画像であったからである。

> ② ……自動車からおろされて、色さまざまの遊女たちは、バスケツトからぶちまけられた一群の伝書鳩のやうに、はじめは歩く方向を知らず、ただかたまつてうろうろして、沈黙のまま押し合ひ、へし合ひしてゐたが、やがてそろそろ、その異様の緊張がほどけて、てんでにぶらぶら歩きはじめた。茶店の店頭に並べられて在る絵葉書を、おとなしく選んでゐるもの、侘んで富士を眺めてゐるもの、暗く、わびしく、見ちや居れない風景であつた。…(中略)…苦しむものは苦しめ。落ちるものは落ちよ。私に関係したことではない。それが世の中だ。さう無利につめたく装ひ、かれらを見下ろしてゐるのだが、私は、かなり苦しかつた。…(中略)…トンネルの入口のところで、三十歳くらゐの痩せた遊女が、ひとり、何かしらつまらぬ草花を、だまつて摘み集めてゐた。私たちが傍を通つても、ふりむきもせず熱心に草花をつんでゐる。
>
> (p.166)

〈私〉は今度、遊女たちの《歩く方向を知らず》に戸惑っている様子を見て、《暗く、わびしく》感じ、これ以上は見下ろすことができないと苦しんでいる。遊女はつまらない草花を《ふりむきもせず熱心に草花を摘》み、となりで見つめている〈私〉はどうでもいいことを、彼女たちは彼女なりには真剣であると、感心しながらも、気の毒のように思えたのである。さすがに、遊女のことも老婆と同じく《苦悩》自画像で描かれていたと言えるのではないだろうか。〈私〉は《苦悩》をプライド高く抱えている以上、いくら多数の女性が現れても侘しく感じるしかないと考えられる。だからこそ、彼女たちは《苦悩》自画像で間違いないと思う。《富嶽百景中に挿入した作者太宰の自画像はなんと暗い》[20]のでもなく、《絶望的な表現であって、社会的な犠牲者》[21]の彼女像でもなく、《苦悩》自画像であったのである。

さて、ここで考えるべきことは、そういう彼女らが〈私〉に《苦悩》と《絶望》だけを与えてくれたかである。富士山に触れ合っている〈私〉には時としてはよかったり、悪かったりした気持ちの揺れ動きが変化の要因と意味であると断言できるかの問題が生じる。

---

19) 前掲載-(9)
20) 種茂勉(1985)「『富嶽百景』序章の重要性」『太宰治Ⅱ』有精堂
21) 大河原忠蔵(1970)「太宰治「富嶽百景」」『太宰治』有精堂

① ……茶店の老婆は気の毒がり、ほんたうに生憎の霧で、もう少し経つたら霧もはれると思ひますが、富士は、ほんのすぐそこに、くつきり見えます、と言ひ、茶店の奥から富士の大きい写真を持ち出し、崖の端に立つてその写真を両手で高く掲示して、ちやうどこの辺に、このとほりこんなに大きく、こんなにはつきり、このとほりに見えます。と懸命に註釈するのである。私たちは、番茶をすすりながら、その富士を眺めて、笑つた。いい富士を見た。霧の深いのを、残念にも思はなかつた。 (p.156)

② 娘さんは、拭き掃除の手を休めず、「ああ、わるくなつた。この二、三日、ちつとも勉強すすまないぢやないの。あたしは毎朝、お客さんの書き散らした原稿用紙、番号順にそろへるのが、とつても、たのしい。たくさんお書きになつて居れば、うれしい。…(中略)…私は、ありがたい事だと思つた。 (p.169)

③ ……レンズをのぞいた。まんなかに大きい富士、その下に小さい、罌粟の花ふたつ。ふたり揃ひの赤い外套を着てゐるのである。…(中略)…私は、をかしくてならない。カメラを持つ手がふるへて、どうにもならぬ。…(中略)…富士山、さやうなら、お世話になりました。パチリ。 (pp.172-173)

〈〈私〉は富士山を見ても興味も持たず、老婆と遊女たちに会っても、侘しく思っているばかりであった。ところが、掛け軸の富士山を熱心に説明し、〈私〉に少しでも反応を引いてもらうために、頑張っている老婆。その後ろにある富士を見て、〈私〉は《いい富士を見た》と感心したことは、富士山のことが良かったというよりも、自分に向けて熱心であることへの暖かい気持ちが込められ、気持いい侘しさが伝わったのではないかと素朴に思う。さらに、茶屋の女中の娘さんに最近は勉強していないでしょうねと、自分は〈私〉の原稿をそろえるのが本当に《たのしい》と興味をちらと見せてくれ、刺激を与えていた。《ありがたい事》だというのは当然ではあるが、娘さんに対する暖かい思いやりと気持ちであったと言えるだろう。また、富士山を降りようとしていたところ、《赤い外套》を着ている二人の女性から富士山を入れ、写真をとってほしいと頼まれる。その時、〈私〉は相当に手が震え、《さやうなら、お世話になりました》と頭を下げる。どうしてだろうか。だれに向かって頭を下げただろうか。それは《傷ついた自分と、傷ついている相手》[22]のことを富士山に頼んだことであり、彼女らにより、生き返ようとしている自分に向かって行ったことではないかと考えられる。

22) 大河原忠蔵(1970)「太宰治「富嶽百景」」『太宰治』有精堂

つまり、〈私〉は《苦悩》を乗り越え、強く生きようとする自分に向き合っていたのである。《性格破綻者》であり、《苦悩》を《藁一すぢの自負》だと思っていた〈私〉は御坂峠で出会った女性たちから《苦悩》自画像を見てしまうが、女性たちから癒される。醜く思っていた世の中のことを、富士山と彼女らにありがたく思えるようになったのである。〈私〉が世の中と向き合えるようになったきっかけは富士山のもとで出会った彼女たちによるものであり、富士山の影響であった。だから、〈私〉は富士山に感謝し、進んで〈私〉に感謝していたのではないだろうか。登場人物に対して、《陽イメージは母性的なもの、陰イメージは父性的なもの》23)ではなく、《人間の生き方、あり方》24)を振り返られた、新しい人生の指標を取り出せたことに違いない。新しい人生の指標、《新しい理想》25)というのは何だろうかをこれから探ってみる。

3.2 〈私〉の《光》

続いて、「黄金風景」に移り、富士山を境にし、変わり始めていた「富嶽百景」の〈私〉と、照合してみる。〈私〉は小さい時から《質のいい方ではなかつた》。のろくさいことが大嫌いで、女中であるお慶をよく虐めていた。何かをやってほしいと頼んでもそれがなかなか時間がかかり、《日は短いのだぞ》となめたりしていた。でも、あまり売れる作家ではない〈私〉の面倒はよく見てくれた。ある日、自炊をしていた所にお巡りさんにやってこられる。戸籍を調べにきたそうであるが、余計に自分に親しく声をかけ、嫌な思いをした〈私〉であった。ところが、そのお巡りさんは自分のうわさはよく聞いていると言い出し、お慶の旦那であることを告げられる。その瞬間、《私の悪行が、ひとつひとつ、はつきり思ひ出され、ほとんど座に耐へかねた》のである。〈私〉は彼に今の生活は満足しているかどうか、幸せであるかどうかを聞いているのはいるが、なぜか《罪人、被告、卑屈》のようになり、落ち込んでしまう。彼はすぐに《「ええ、もう、どうやら。」》と恥ずかしそうに答え、その様子が余計に〈私〉を小さくしてしまうくらいであった。さらに、お慶をお礼に上がらせてもいいかを聞かれ、《飛び上るほど、ぎよつとした》のである。三日後、海に出かけようとしたところ、玄関のところで《浴衣着た父と母と、赤い洋服着た女の子と、絵のやうに美しく並んで立つてゐた》お慶の家族とばったり会ってしまっ

23) 佐藤隆之(2007)「「富嶽百景」論-陽・母性・花草VS陰・父性・通俗-」『太宰治の強さ』和泉書院
24) 石賀　昇(1974)「「富嶽百景」の一解釈」『解釈』第20-6巻 解釈学会
25) 渡部芳紀(1985)「太宰治論-中期を中心として-」『太宰治II』有精堂

た。ところが、〈私〉は「来たのですか。けふ、私これから用事があつて出かけなければなりません。お気の毒ですが、またの日においで下さい。」と言い、まるで逃げるようにして尻尾を見る間もなく、飛び出した。どうしてだろうか。この家族に会ってから〈私〉にはどういう変化が現れてきたのだろうか。《お慶との再会》[26]により、《「更生の出発」》[27]や《「私」の再出発への決意が表明され》ていると述べてはいるが、その前後補足がなかったことが少し物足りないと思った。〈私〉はお慶の家族に会ってから、《心のどこかの隅で、負けた、負けた》と呟いていた自分の心の叫びを聞いてしまう。幸せそうな家族の様子を見て感じたことももちろんあるわけだが、お慶の旦那さんが自分に向かって《「頭のよささうなお方ぢやないか。あの人は、いまに偉くなるぞ。」と話しているところを、お慶は「あのかたは、小さいときからひとり変つて居られた。目下のものにもそれは親切に、目をかけて下すつた。」》と《誇らしげな高い声》で話しているのを見た瞬間から、そのように考えたのである。要するに、今まで馬鹿にしていた彼女に自分のことを誉められ、頭が下がるほど恥ずかしかったし、うれしかったのである。〈私〉には相当なショックであり、新しい事件であるかも知れない。気持ちいい《けはしい興奮が、涙で、まるで気持ちよく溶け去つてしまふ》ほどの《負け》であったのである。〈私〉が負けたのは事実ではあるが、勝利においての《負け》ではなく、《あすの出発にも、光を与へる》くらいのまぶしい《光》のような事件であり、プレゼントのような存在であり、《新しい理想》であっただろう。

〈私〉は小さい時から、金持ちのお坊さんのように可愛がられ、大事にしてもらった。だからか、女中であるお慶のことを粗末にしていたかもしれない。人の大事さということも分からず、わがままに生きていたのである。でも、その人から大事にされていたことは世の中を見る目、人を見る目を変えられるきっかけとなるだろう。《かれらの勝利》というのはお慶の家族のこと、進んで、お慶の優しさを意味していたのではないだろうか。つまり、人から救われたことであり、その人から生きる力をもらったことになり、《太宰の祈り》《明るさ美しさ》[28]が込められたのである。《太宰の祈り》というのは人から生きる力をもらったことであり、人であることをもう一度言及しておきたい。「富嶽百景」と「黄金風景」の〈私〉は人に傷付きながらも、人にいやされ、《苦悩》が《自己浄化》[29]の《光》に変わったこ

---

26) 菅原洋一(1997)「「黄金風景」論」『太宰治研究第4号』和泉書院
27) 荻久保泰幸(1971)「編年史・太宰治昭和十四年」『国文学解釈と教材の研究』第15巻 第1号 学燈社
28) 奥野健男(1957)『太宰治論』近代生活社、pp.133-134
29) 近藤巖(1997)「「富嶽百景」に関する一考察」『私学研修』第75巻 財団法人私学研修福祉会

とは十分に考えられたのである。

4．《酸漿》と《黄金》の意味

〈私〉の目には《クリスマス飾り》に似ていると思っていた富士山が《あざやかに消えず残つた》《金剛力》のような《月見草がよく似合ふ》ように見えてきた理由と意味について考えてみよう。まず、花のことを辞書的に考えてみると、月見草とはウィキペディアによれば、《アカバナ科マツヨイグサ属に属する多年草》の花である。白色が夜になれば、だんだんピンク色に変わるそうである。だからか、《移り気》という花言葉の意味を持っているし、《美人》《無言の恋》などの意味もあり、《自由な心》という意味まであるそうである。富士山に《月見草》を描き入れたことを《太宰独自の美学的配慮》[30]によるものであると述べているが、美しく構成されているために、《美学的配慮》であるという指摘は無理はないと思う。そもそも、どうして《月見草》を選んだかが気になるところであり、相馬正一[31]は《太宰の故郷の山野や海岸には「オオマツヨイグサ」が群生し、土地の人たちはこれを月見草》で呼んでいたらしく、これに見慣れている太宰はそれが好きになり、《太宰は〈月見草〉が好きだった》と指摘している。また、相馬正一は《太宰が富士とは対峙するものに〈月見草〉を選んだのは、幼少時から見馴れてきた故郷の草花に自分の鬱屈した思いを託したかったから》だと述べている。言い換えれば、《月見草》というのは太宰になることであり、《鬱屈》な〈私〉であると、断言できるかという問題がここで生じる。〈私〉は二度と思い出したくもない悲惨な目に逢い、その記憶を飛ばしたい気持ちを抱え、御坂峠に登った。そこで、老婆の隣のある《路傍の一個所》にきれいに咲いている《黄金色の月見草の花ひとつ》を発見する。たぶん、黄色く見えたことは夕日にかかり、ピンク色がそういう風に見えたと考えられる。御坂峠に登る前と後の変化が明らかであることを前提としているため、《鬱屈》な〈私〉という一段面よりは《「思ひをあらたにする」「旅」は、みごとに所期の目的を果たした》といえ、《月見草は「思ひをあらたに」した「私」》ではないかと考えられる。《苦悩をひめつつ「金剛力」に生きる月見草》[32]は〈私〉であったのである。《月見草》というのは富士山で出会った彼女らに強い元気、

30) 桂英澄(1963)「太宰治と富士」『国文学解釈と教材の研究』第8巻 第5号 学燈社
31) 相馬正一(1985)『評伝太宰治第3部』筑摩書房、pp.46-47
32) 柴崎芳夫(1978)「富嶽百景」『太宰治2仮面の辻音楽師』教育出版センター

《新しい理想》《光》というような変化要因となった《金剛力》のような覚悟であり、覚悟の喩えであっただろう。《女性には月見草がよく似合う》[33]のでもなく、弱い存在でもなかったのである。強く《あざやか》に咲いている《月見草》は《自由な心》を求めていた〈私〉の覚悟であり、《理想》であった。

> その翌る日に、山を下りた。まづ、甲府の安宿に一泊して、そのあくる朝、安宿の廊下の汚い欄干によりかかり、富士を見ると、甲府の富士は、山々のうしろから、三分の一ほど顔を出してゐる。酸漿に似てゐた。 (p.173)

《思ひをあらたにする覚悟》で訪ねた御坂峠の天下茶屋での生活は結婚の話で一段落し、山を下りることにする。下りてから見上げた富士山のことを《月見草》に続き、今度は《酸漿》に似ていると書いている。ウィキペディアによれば、《酸漿》は《ナス科ホオズキ属の多年草》で淡い黄色の花であるそうだ。花言葉では《不思議》や《自然美》または《頼りない》という意味もあり、《心の平安》の花言葉もある。《陰惨》のように見えたり、汚れたおもちゃのように見えたりしていた富士山のことはそこで出会った彼女の触れ合いにより、《月見草》と《酸漿》のように見え、変化があることは明らかになってきた。ところで、《金剛力》のある《月見草》の上で、《酸漿》のように見えてきたというのはどういう意味を持っているだろうか。日頃、〈私〉は《私の世界観、芸術といふもの、あすの文学といふもの、未だ愚図愚図、思ひ悩み、》《見悶えしてゐた》が、《眼前の富士の姿も、別な意味をもつて目にうつる》ようになった。それは《「単一表現」の美しさ》に囲まれている美学としての富士山であったからだろう。この「単一表現」については周知のように、渡部芳紀[34]は《〈単一表現〉といい、〈かるみ〉といい、中期の太宰の理想の背後に俳句的世界があることは注目に値する》と述べ、鶴谷憲三[35]は《主観の浄化》であると述べている。〈私〉は混沌の中、天下茶屋での生活とそこで出会った彼女らにより、癒されたのは事実である。《身悶え》の一日はありがたい一日の重ねの上で、「単一表現」という《素朴な、自然のもの、従つて簡潔な鮮明なもの》の《美しさ》に満たされ、《苦悩》でなくなったのだろう。

要するに、《苦悩》の先には越次倶子[36]が指摘していた《「酸漿」は遠く離れた富士への

---

33) 平岡敏夫(1967)「富嶽百景」『国文学解釈と教材の研究』第12巻 14号 学燈社
34) 渡部芳紀(1977)「評伝・太宰治」『国文学解釈と鑑賞』第548号 至文堂
35) 鶴谷憲三(1985)「太宰治の「単一表現」」『太宰治Ⅱ』有精堂
36) 越次倶子(1981)「「富嶽百景」試論」『国文学解釈と鑑賞』第596号 至文堂

願望の表れ》ではなく、《心の平安》の《酸漿》と《自由の心》の《月見草》の喩えにより、日本的なものと言える俳句の世界である《かるみ》の上で、《素朴》《自然》《簡潔》《鮮明》なことと重なり、前向きになろうとしていた〈私〉が描かれていたのである。《正常なるものへの復帰の契機》37)となってほしいという素朴な〈私〉としての希望であり、願望ではなかっただろうか。

5．おわりに

以上のように、本論文では「富嶽百景」と「黄金風景」を通じて、《苦悩》に関する再解釈をしてみた。主人公である〈私〉は東京での苦しい生活を引き払い、新しい気持ちを入れ替えたく御坂峠の天下茶屋に泊まる。ここで泊まる前までの富士山に対する気持ちは混沌となっている〈私〉の気持ちが富士山にそのまま映されているかのように、苦しがっている富士山の表現であった。ところが、天下茶屋で泊まってからは何もかも受け入れられる大きな器のように楽しがっている富士山の表現となっていた。その理由をそこで触れ合っている女性らによるものではないかと考えてみた。その女性の気持ちのことを《苦悩》を抱えている〈私〉にすれば人が勝手に《苦悩》を抱えているかのように思えたのである。ところがが、だんだん《光》のように変わり、《酸漿》と《月見草》のように〈私〉には《心の平安》と《自由な心》が込められている富士山になったのである。だから、「富嶽」「百景」と「黄金」「風景」が人間「百景」であり、人間「風景」となった物語であった。つまり、人の出会いにより、《あすの文学》は何であるだろうかと悩み、自分に自信すら持っていない〈私〉に《光》を与えてくれた契機の作品であっただろう。《自由な心》と《心の平安》を求めていた太宰の中期における姿勢の上で、「単一表現」である《素朴》《自然》《簡潔》《鮮明》さが満たされるべきではないだろうか。そればかりでなく、人と向き合い、素直になり、努力していく新しい自分に出会っていたのである。太宰の中期は希望を失っていた前期とは違い、希望を取り戻せたかのように変わり、《苦悩》の先が《光》となった作品であった。

【参考文献】

太宰治(1962)『太宰治全集』第2巻 筑摩書房
_____(1962)『太宰治全集』第11巻 筑摩書房
井伏鱒二(1989)『太宰治』筑摩書房

37) 川崎寿彦「イメジャーリ」『国文学解釈と教材の研究』第13巻 第9号 学燈社

奥野健男(1957)『太宰治論』近代生活社
大塚常樹(1999)「太宰治の道化について、富士山を念頭に」『太宰治-その終戦を挟む思想の転位-』双文社出版
大河原忠蔵(1970)「太宰治「富嶽百景」」『太宰治』有精堂
佐々木啓一(1989)「『富嶽百景』-自閉のなかの自由なイメージの世界-」『太宰治論』和泉書院
佐古純一郎(1963)『太宰治論』審美社
佐藤隆之(2007)「「富嶽百景」論-陽・母性・花草VS陰・父性・通俗-」『太宰治の強さ』和泉書院
柴崎芳夫(1978)「富嶽百景」『太宰治2仮面の辻音楽師』教育出版センター
相馬正一(1985)『評伝太宰治』第3部 筑摩書房
鶴谷憲三(1985)「太宰治の「単一表現」」『太宰治Ⅱ』有精堂
種茂勉(1985)「『富嶽百景』序章の重要性」『太宰治Ⅱ』有精堂
三谷憲正(1998)「富嶽百景」『太宰文学の研究』東京堂出版
服部泰喜(2001)「富嶽百景」『終末への序章-太宰治論』日本国書センタ
渡部芳紀(1985)「太宰治論-中期を中心として-」『太宰治II』有精堂
山内祥史編(1997)『太宰治著述総覧』東京堂出版
菅原洋一(1997)「「黄金風景」論」『太宰治研究』第4号 和泉書院
川崎寿彦(1968)「イメジャーリ」『国文学解釈と教材の研究』第13巻 第9号 学燈社
越次倶子(1981)「「富嶽百景」試論」『国文学解釈と鑑賞』第596号 至文堂
鶴谷憲三(1993)「昭和十四年」『国文学解釈と鑑賞』第745号 至文堂
_____(1996)「『富嶽百景』-その構造と時の流れと-」『国文学解釈と鑑賞』第781号 至文堂
桂英澄(1963)「太宰治と富士」『国文学解釈と教材の研究』第8巻 第5号 学燈社
荻久保泰幸(1971)「編年史・太宰治昭和十四年」『国文学解釈と教材の研究』第15巻 第1号 学燈社
平岡敏夫(1967)「富嶽百景」『国文学解釈と教材の研究』第12巻 第14号 学燈社
渡部芳紀(1977)「評伝・太宰治」『国文学解釈と鑑賞』第548号 至文堂
石賀　昇(1974)「「富嶽百景」の一解釈」『解釈』第20-6巻 解釈学会
近藤巖(1997)「「富嶽百景」に関する一考察」『私学研修』第75巻 財団法人私学研修福祉会
長谷川達哉(2007)「天下茶屋再訪-続〈教材〉としての『富嶽百景』-」『中央大学国文』第50巻 中央大学
松本和也(2010)「「私」の再起/表現の達成-「富嶽百景」-」『太宰治の自伝的小説を読みひらく-「思ひ出」から『人間失格』まで-』立教大学出版会

※ 本文の引用は《　》、語り手は〈　〉の記号を使用していることを言及しておく。

논문투고일 : 2015년 03월 10일
심사개시일 : 2015년 03월 20일
1차 수정일 : 2015년 04월 08일
2차 수정일 : 2015년 04월 14일
게재확정일 : 2015년 04월 20일

<要旨>

太宰治の中期文学における《苦悩》の再解釈

－「富嶽百景」と「黄金風景」を中心に－

「富嶽百景」と「黄金風景」と通じて、《苦悩》を再解釈してみた。富士山に対する〈私〉の気持ちが相当に揺れ動いている作品であったが、《苦悩》を自慢している<私>が富士山で何人かの女性たちに出会う。その出会いから富士山に対し、《光》のような《月見草》が咲いていると、周囲のことを明るく解釈し、感じ、変わっていることが分かった。太宰の中期が「素朴」「自然」「簡潔な」ことを指向していたことはよく周知の上で、希望を失っていた前期とは違い、自分と向き合い、正直になり、希望を取り戻せたかのように、《苦痛》が《光》に変わっている作品であった。

The reinterpretation of “distress” in the mid-term literature of Dazai Osamu

－The “Fugaku Hyakkei” and “golden landscape” in the center－

And「Fugaku Hyakke」through the「golden landscape」, I tried to re-interpretation of《distress》. By my feelings, feelings against Fuji had wavered. Had a “distress” <I> is by her who I met in there, become a presence, such as《light》, Fuji had changed as《nightshade》and《evening primrose》. So, is「Fugaku」of the「golden」and「hundreds of views」,「landscape」is human「hundreds of views」, it was a story that became a「landscape」. This should be of Dazai in the medium-term is a《single representation》《rustic》《natural》《concise》《sharpness》of is met, Ariel in the attitude of Dazai in the medium-term. However, rather than this just a matter of, facing the people, will be honest, the effort to meet the new myself go, it is was let go. Medium-term Unlike the previous year, which had lost hope of Dazai, style changes as if regain hope,《distress》is《light》, and <I> is earnest facing the people and myself, solidified awareness is a work, it is was thought the meaning of re-interpretation.